

無国籍者にも居場所を

語る人 □

「無国籍ネットワーク」代表

陳天璽さん

日本社会で国籍を持たない「無国籍者」として生きるのはどうのことか。「国籍」とは何か。それを問い合わせ、無国籍者を支援してきた市民グループ「無国籍ネットワーク」が、今月にもNPO法人になる見込みです。代表で国立民族学博物館准教授の陳天璽さん(39)に活動に込めた思いを聞きました。

——陳さん自身も2003年に日本国籍を取得するまで無国籍だったそうですね。

「両親は中国大陸出身の台湾人で、私は横浜中華街で生まれました。一家は中華民国籍でした。72年、日中国交正常化によって日本は中華民国(台湾)との外交関係を断絶し、私たちは国籍の選択を迫られました。旧

満州生まれで、戦後の内戦で台湾に渡った父が苦しんで選択したのは、日本でも中国でもなく

「無国籍」になることでした」

「私は小・中と中華学校に通いました。ところが大学生の時、台湾と日本の両方の空港で入国を拒まれる体験をしました。祖国台湾にも、生まれ育った日本に

も入国できない。身体で『無国籍』を感じて以来、自分は何者なのかと悩み続けました」

——国内外の無国籍者の実像を、ドキュメンタリー映画や著書に描きましたね。

「映画や出版をきっかけに、無国籍者や弁護士から相談が寄せられるようになりました。でも私個人の力では限界がありました。弁護士や医師のサポートが必要でしたし、問題を社会に知らせないと何も変わらないと思い、09年1月にネットワークを作りました」

「外国人登録証に『無国籍』とある人は千数百人ですが、実態ははるかに多い。特に無国籍で在留資格のない人の状況は深刻です。摘発されると受け入れ国がないため強制送還されずに入国管理局に長期収容され、一時的に解放されても生活手段がない。精神を病む人も少なくないのです」

——NPO法人化の目的は、「無国籍者が集まれる場を作り、ネットで法律相談をしてきました。法人化によって、無国籍者を助けるしくみを整備する

「でも本当は組織は苦手なんです。私は日本の社会では平等に扱ってもらえないと思い、海外に出て暮らすことばかり考えていました。それが日本に戻つて日本の組織で働くことになると、自分でも驚きました」

——なぜそうしたのですか。

「日本という環境が今の私を育ててくれたからです。米国に生まれていたら楽だったでしょう。でもそうしたら無国籍の問題に気づくこともなかつた。日本で何かするのも私に与えられたことだと思えたのです」



チエン・ティエンシ 1971年生まれ。国立民族学博物館准教授。筑波大大学院博士課程修了。米ハーバード大の客員研究員などを経て、03年から現職。専門は移民、マイノリティー研究。著書に『華人ディアスpora』『無国籍』など。

日本で育ったから問題に気づけた

——日本で育ったから問題に気づけた

大切なのは個人が尊重される社会

——大切なのは、一人ひとりが尊重され自信を持つ人間関係や居場所があることではないでしょうか。国籍の有無や違いに関わらず、尊厳をもつて暮らせる社会になつてほしい。そのため声は小さくとも叫び続けたい」（聞き手・伊佐恭子）